

自然観察場面における母親の3歳未満児に対する働きかけの特徴 —子育て支援施設の事例から—

椛島 香代*・森下 葉子*

子育て支援施設における母子相互作用を自然観察法によって記録し解析した。受容的な雰囲気の中で日常生活の状態を観察することが可能な場所であるため、自然な母子相互作用を記録できる。対象は0-2歳の乳幼児と母親19組である。来所した母子をランダムに自然観察し手記で記録した。母子相互作用を母親の行動に注目して分析したところ、以下のことが明らかになった。1) 母親は乳幼児の発信に対して身体接触などの非言語行動、言語による応答を行っている。2) 母親が他者と会話しているなどの場面では身体接触や見守りを行い、乳幼児へ意識を向けている様子が観察された。また、乳幼児も母親の注意を喚起する行動も見られ、応答がない場合の発信手段等を学習していることが示唆された。3) 応答的なかかわりの中では乳幼児の望ましい経験に結びつくような足場づくりに類するかかわりもみられた。4) 母親の意図が反映している働きかけも見られ、この場合は乳幼児の発信に応答するものではなく、母親側から発信するものである。

Key Words：母子相互作用，母親の役割，自然観察法，子育て支援施設

I はじめに

乳幼児は、養育者との関係を基盤にしながら徐々に身近な環境へ働きかけを始めることがよく知られている。乳幼児が周囲の環境に対して関心を生起することやそこでかかわりを持つようとする際、身近な養育者が与える影響は大きいと考えられる。乳幼児の身のまわりに何を置き、何を見せ、触らせるかなどの環境を構成するのも、必要に応じて外界とのかかわりを促す、継続する働きかけを行うのも養育者であるからである。特に、0歳から2歳児の乳幼児においてはその移動能力も未熟であるため、養育者の果たす役割は大きい。

保育、子育ての支援を考える場合、日常の母子関係をとらえることが欠かせない。また、子育て

について地域や関連施設の支援を期待されている(内閣府, 2014)。保育現場では乳幼児の保育のみならず家庭支援の重要性が増し、保護者対応についての専門職性が必須となっている。家庭環境や家族関係を把握しながら支援していくことが求められているのである。しかしながら保育所や幼稚園現場では、親子のかかわりを保育士、幼稚園教諭が観察する機会は少ない。さらに、母子の日常の自然な関係を把握できなければ支援に役立てることが難しい。このような点において自然観察場面の母子相互作用を分析する意義がある。その特徴をとらえることは、具体的な支援の在り方を考察する上で有効な資料を提供するものであると考える。本研究においては、自然観察場面の母子相互作用を分析し母親の果たす役割を考察する。

*人間学部児童発達学科

II 研究方法

母子の自然な相互作用を観察するため、A子育て支援センターに來所する親子を自然観察法によって記録し、分析を行う。

具体的には以下の方法で行う。

〈観察期間〉2012年7月から同年10月

〈観察対象〉0歳から満3歳までの子と保護者(母親)19組。

〈倫理的配慮〉A子育て支援センターでは、初めて來所した際に保護者にパンフレットと口頭で利用方法の他、研究施設であることも説明を行い文書で承諾を得ている。観察対象は承諾を得ている親子とした。また、センター運営委員会において研究について審議し承認を得た。

〈観察場所の特徴〉A子育て支援センターで資料収集を行った。周辺地域の0～3歳未満の乳幼児と保護者が利用できる。開所時間内の入退室は自由であり、乳幼児それぞれが興味をもった遊具などで好きな遊びを行う。乳幼児と保護者の自然なかかわりの様子を観察することが可能である。季節や天候にもよるが開所日1日につき10～30組の親子が來所している。また、学生の実習の受け入れもしているため、学生の参観、参加もある。

〈観察方法〉場面は設定せず、乳幼児と保護者が遊ぶ様子を自然観察法で30分～1時間程度、観察する。記録は手記で行う。

〈分析方法〉観察されたエピソードを以下のような手続きで整理する。ある親子の一日の中での継続記録については、便宜上番号をつけて整理した(No.1 - No.25)。それぞれの記録のうち観察途中で遊びが変化するなど場面が変わった場合には、事例を分けることとした。場面は記録の中で順にaからふりわけた。例えば、事例1aは、記録の1番の初めの場面ということになる。

分析・考察に当たっては、以下の手続きをとった。

- ①乳幼児、保護者のどちらが起点となった相互作用であるかを分類する。
- ②乳幼児が起点となった相互作用について、保護者が乳幼児の興味や行動に対してどのように応

答しているか応答の特徴によって分類、考察する。

- ③保護者が起点となった相互作用について、保護者の意図やかかわりの特徴によって分類、考察する。

尚、事例の分類については研究者2名がそれぞれに行った後、協議によって決定した。

III 母子相互作用の特徴と考察

観察期間中に採取された記録は25である。25記録すべてが母親と乳幼児の記録である。記録の中で、乳幼児が遊びを変えたり、母親が別の活動へ誘導したりして遊びや活動が変化した際場面を切った。その結果、全体で48場面となった。採取した記録と場面数、記録Noを月齢ごとに表1に示す。これらの場面で母親の行動に注目しながら母子相互作用を分析するといくつかの特徴がみられた。事例を挙げながら考察していく。

1. 母親が応答的にかかわる

子育て支援施設に來所し自由に過ごすことができる場において母親は、乳幼児の発信や行動に対して応答的にかかわることが多い。一番多い24場面であった。これらの事例を詳細にみていると、質に違いがみられた。

事例1 (記録No.17a) B (10カ月)

カブラの箱を叩く。カブラをつかみなめる。カギとカブラを両手で打ち合わせる。①母親はBの叩くリズムに合わせ首を振る。Rがくる。②母親「お兄ちゃんがきたね」カブラを持ったまま立ったり座ったりするがカブラを落としてBの股の間に入る。Bは拾おうとするがどンドン奥に行ってしまう。③母親「あれ?ないね」Bはようやく拾ってまた口に入れる。母親はよだれをふいてやる。カギをなめる。「いや～、Bちゃん」といってカギをふく。B「うい～、うい～」と声を出す。④母親「うん、うん」と同じくらいの高さの声で答える。B「うい～」と繰り返す。⑤母親「そっか～、うん」と応じる。

乳幼児の行動に、母親が細やかに応答している事例である。下線①および③では、母親は乳幼児の行動に同調している。また下線②④では、周囲

表1 月齢別の記録数及び場面数

月齢	記録数	場面数	記録 NO
0~5	1	2	11a,11b
6~11	13	26	2a,2b,4a,4b,5,7,8a,8b,9a,9b,10a,10b,12a,12b,12c,15a,15b,17a,17b,17c,18,23a,23b,24a,24b,24c
12~17	6	13	3,6a,6b,6c,13a,13b,16a,16b,16c,19,25a,25b,25c
18~23	1	2	20a,20b
24~29	2	3	1a,1b,22
30~35	2	2	14,21
計	25	48	

の状況を言葉で表現している。このような行動は、乳幼児に言語刺激を与えるとともに人への関心を育てること(下線②)に繋がっていくと考えられる。

事例2 (記録 No. 4a) F (6カ月)

スロープを転がす玩具で遊んでいる。母親はFの後ろにすわりFの手に自分の手を添えて一緒に玩具を転がす。Fは転がる様子を見て玩具に触ろうとしたり、スロープに触ろうとしたりする。Fが母親によりかかると母親は受け止めて体を優しくポンポンとする。鏡の方を見て母親に支えてもらいながら足をジャンプするように動かす。隣に来た他児をじっとみつめる。母親はその子と母親と話す。Fは母親の身体にふれ、母親を見る。母親は触れてくるFに手をそえFの様子を見守る。

非言語行動で応答している事例である(下線)。身体接触によりコミュニケーションを図っている。乳児前期にはこのような行動が多くみられるのではないかと考えられる。乳幼児の態勢や行動に合わせながら母親も身体で寄り添っていくのである。このようなやりとりは愛着形成の上でも重要な要素となるだろう。特に、この事例のように柔らかい接触や母親自身のリラックスした身体の状態が乳幼児の安定を図るといえる。母親自身が子どもの身体と自分の身体を同調させているのである。初めての来所や入室したばかりで乳幼児が場に慣れるまでの過程の中でもこのような身体接触による相互作用はみられる。いずれも母親は乳幼児からの接触の要求(抱きつく、手をつなぐなど)に自然に応じている。母親はスタッフと挨拶するなど他者とかかわっていてもこのような行

動をとることに特徴がある(記録 No.11a, 19, 23a, 24a)。日常生活の中では、乳幼児との非言語行動による相互作用が多く生起しているものと考えられる。月齢があがると、名札の記入など入室後の手続きを母親のそばで見た後遊び始める(記録 No.21 33カ月児)など母親と適切な距離を取りながら行動する姿もみられた。乳幼児は母親をはじめとする身近な大人と身体接触を経験する中で愛着を形成し、探索行動を始めるものであることが改めて確認された。

事例3 (記録 No.9a) A (10カ月)

A、カプラと別の玩具を持ち、玩具(アヒル)をじっとみつめる。母親はそばに座って様子を見守る。母親は他の母親のグループに目を向けて気になる様子。一度立ち上がるが再びAのそばにすわる。①アヒルの玩具をAに向かって転がす。Aは、アヒルを追ってハイハイして進む。Aは遠くの他児や玩具を見つめる。②母親はAが見つめている方向にハイハイをする。Aは母親を追いかけてハイハイする。たどり着いた先にあった玩具に興味を持ち、触る。母親はAのそばに座りその玩具を取り上げてAに手渡す。

事例4 (記録 No.10b) A (10カ月)

母親に抱かれてカギをいじり、母親や雑誌を見る。母親はAを床におろし膝の間で遊ばせる。A、ハイハイをして記録者のところへ来る。記録者を見上げる。母親③「こんにちは、っていうんだよ、いいカギ持ってるでしょう？」と声をかける。Aは近くにあった玩具(くるま)の音が気になり、玩具の方へ移動する。母親④「いい音してるね」Aはカギを離し、玩具を持つ。

下線①では、Aが目を向けた玩具を転がすことによってハイハイを誘発している。母親がAの関心を理解するとともにその玩具を活用して運動発達を促している。また下線②でも母親自身がハイハイをすることによってAに追わせている。この時にも、母親はAの視線を捉えて関心を示した玩具に向かって誘導している。A自身の運動経験を増やすとともに関心のあるものへ自身で行動する力を育めるような配慮をしている。また③のように、Aが人に関心を示した際には、言葉でつないでいる。「こんにちは」という人と人がつながる挨拶と「いいカギ持っているでしょう」というAの気持ちを代弁するような内容の言葉である。状況の中で適切に言語刺激を与えている。このような母親の行動は先に示した事例17a下線②にもみられる。これらの事例は、母親が乳幼児の行動に応答するだけでなく、それを捉えながら周囲とのかかわりや乳幼児の発達を促すようなかかわりがあることを示している。乳幼児の発達を促すうえで望ましい経験に結びつけられるようなかかわりである。いわゆる「足場づくり」といえる。応答性の中にも質の違いがあるといえ、受容的なかかわりと「足場づくり」とがどのように表れてくるのか、また、母親自身の意識や乳幼児理解との関連もあるのか、今後検討していく必要がある。

2. 母親が自分の意図を反映する

母親は、乳幼児にとって新しい経験、望ましい経験に対して意図的にかかわる。特に、子育て支援施設では、自宅とは異なる遊具や活動が用意されている、他の親子とかかわる機会もあるため、自宅ではできない経験を促すかかわり、人との関わりを促すかかわりがみられた。この場合は、乳幼児の発信に対して母親が応答するというのではなく、母親からの発信によるものである。

事例5 (記録 No. 3a) G (14 カ月)

箱のそばにいとTが来て一緒にのぞく。母親はカウンターのところから手招きして「Mちゃんが来ているよ」「ブロックのところにいるよ」と言う。G、会いに行く。

Gは友だちが来ていることに気づかなかった

が、母親が情報を提供することで気づき行動した事例である。子ども同士を仲立ちするかかわりを行っている。

事例6 (記録 No.2b) D (11 カ月)

母親はDを水着に着替えさせる。Dが帽子を持ち母親に差し出すとそれを受け取り、かぶせる。抱き上げて水遊び場に行く。抱っこからおろしてDを水遊び場にすわらせる。自分も近くにすわる。①母親は洗面器に水を入れDのそばに置く。②玩具に水を入れてDに少しかかるようにふる。Dは玩具を欲しがったので、母親が渡す。Dは洗面器のそばで玩具を持ったり離したりする。母親は日光に注意し、Dが日陰になるように自分の位置を変えてすわる。③水を少しずつDの背中につけてあげる。④水を流して見せる。Dは水に触れる。

母親は、Dが水に触れ楽しめるような配慮を行っている。下線①では、環境を整えているし、下線②③④では、刺激して興味を喚起している。普段あまりしていない遊びにスムーズに入っていくよう、また楽しめるような配慮をしている。

事例7 (記録 No.15b) H (10 カ月)

カタカタから手を離し床にうつぶせになり母親の姿を目で追う。母親は名札の記入をしている。Hは母親の動きを目で追う。母親は、Hが離れたカタカタをもとの位置に戻し、別の玩具を持ってくる。Hは人が集まっている方に目を向けそちら方へハイハイ(ずりばい)して少し進む。母親が持ってきた玩具をじっと見た後、母親の顔を見る。母親と視線があい、母親はHに向かって微笑みかける。母親は玩具を動かして見せる。Hは他の音に目をむけたり、玩具に目を向けたりを繰り返す。母親はHの見る方に一緒に目を向けるとともにHが玩具を見た時に玩具を動かして見せる。Hは母親の持つ玩具に手をのばす。

母親は、Hの好みそうな玩具を持ってくるが、それをすぐに使わせようとするのではなく、Hの興味を喚起するような行動をしている。子どもの視線や興味の方角にあわせながら子どもの視線が向いたときに玩具を動かして見せて遊びに誘導している。この事例は、言語獲得の上で重要であるとされている三項関係が成立している例でもある。母親が乳幼児の視線や興味を捉えながらタイ

ミングよくモノとつないでいる。

事例8 (記録 No.1a) C (25 か月)

C, お茶を持って来所。受付に母親と行く。母親「こんにちは〜」と明るくスタッフと挨拶。Cの背中を柔らかく押してスタッフの前に押し出そうとする。母親「ご挨拶練習したでしょ」Cは母親の後ろに隠れ緊張した表情。スタッフは笑顔で後ろに隠れたままのCに「Cちゃん、おはよう」と声をかけるが、Cは母親の後ろに隠れスタッフと目を合わせるが挨拶はしない。Cは母親とトイレに行き、母親と手をつないで歩く。母親のそばからはなれず荷物の整理をする母親のそばで椅子の上に立ち周りを見ている。母親と手をつないだり、母親の周りをグルグル回ったりする。母親に見守られながらおもちゃを出し始める。

母親が挨拶を促すが、うまくできなかった事例である。母親の意図は必ずしも乳幼児に受け入れられ、また母親が期待するような行動をするとは限らない。この事例では母親は入室時に「先生」に挨拶をさせたかったがCはできなかった。しかし、そのことを叱るようなことはせず、身体接触を求めるCに応じている。それによってCは安定し遊び始めることができていく。子育てや保育では乳幼児の情緒、発達の状態を受け入れながらかわっていく必要がある。母親は子育てをしながら乳幼児についての理解を深めるとともに、乳幼児に対して期待することも出てくる。母親がどのように自分の意図を我が子に伝え、どのような方法で支援していくかという点でも母親、乳幼児双方の個性や関係性の特徴が表れるものと考えられる。

この事例では、Cが母親の促しに応じて挨拶をすることができなかったが、その後のCの行動をみると(波線部分)そのことが情緒に影響していることがわかる。母親との身体接触を求め、自分の情緒の安定を図ろうとしている。母親がそれを受け止めることで遊び始めている。乳幼児にとって負担となるかわりは、その情緒に影響を及ぼすことが示唆される。

このように、母親は自らの意図を間接的直接的に伝えている。これらのかかわりは乳幼児の新しい経験への広がりを支えるものである。一方で、

その意図が乳幼児の状態と乖離していると、乳幼児が拒否したり、応えられなかったりすることもあるだろう。母親は日々、乳幼児とのかかわりの中で探り、試し、修正しながら子育てを行っているのだと考えられる。

3. 母親が応答しない・乳幼児の発信に試行錯誤する

母親が他者と話していたり、他のことに関心を向けていたりすると乳幼児からのかかわりに応答しない場合がある(場面数6)。母親が友人やスタッフとの会話に夢中で気づかなかった事例がある(記録 No.12a, 15a) 一方でスタッフと話をしているときなどは、視線や言葉で応答することはないが、抱くなどして身体接触を図りながら行っている(記録 No.11a)。いずれの事例も、母親は乳幼児に視線を向け安全には配慮しており、乳幼児を常に意識している様子は見て取れた。また、母親が気づかなくても他の母親が気づいて応答した例もある(記録 No.12a, 6c)。自然観察場面での記録であるがゆえに採取できた事例であろう。

日常生活で常に母親が乳幼児に応答することは不可能である。「見ていない」場面があるからこそ、育つこともあるだろう。記録 No.13a (17 か月児)では、幼児は母親が注意を向けるまで「ママ!」「ママ!」と呼びかけているし、記録 No.20b (18 か月児)では、幼児が母親に近づいて笑顔で抱きつくことで母親の注意を喚起してその後共同注意場面を作り出している。幼児が発信する力、自らの要求を表現する手段の獲得につながることもあるのではないかと。一方で、フィールドである子育て支援施設は母親の子育ての心理的負担を軽減することも目的としている。他の母親と「大人同士」の会話を楽しむことで母親のリフレッシュになることもあるだろう。常に応答を要求することは、母親にとって負担になるだろう。母親の個人差など配慮しながら慎重に取り扱うべき問題であると考える。

また、以下に示す事例では、途中から母親の応答がなくなった例である。

事例9 (記録 No.2a) D (11 カ月)

D, ガラガラを転がす。学生の前に立ち止まって学生の横にあったガラガラを指さす。母親はDの移動に後ろからついていく。Dの指さしに対して「こちらのガラガラにしようか」と別のガラガラをDに見せる。そばにいた学生に「お姉さんこんにちは」と挨拶する。Dは近くのぬいぐるみを指さす。母親は、そのぬいぐるみを取りDに渡す。D, うけとり、母親に抱きつく。その後、Dはガラガラを指さしたり、鏡を指さしたりするが、母親は水遊びの様子を見ていて応答しない。

Dの指さしに対して、母親は応答しているが、途中から応答がなくなった事例である。日常の場面では母親は子育てをしながらさまざまな活動を行う必要があるため、このようなことは起こり得る。自然なやりとりであろう。しかしながら、日常は積み重ねでもある。応答の頻度がいつも少ない場合、乳幼児にとって満足を得にくい状況が続いている場合などでは、母子関係に影響が出る可能性もある。母子それぞれのパーソナリティ、母親自身の社会性などを理解しながら観察を継続していく必要性がここに出てくる。特に、子育て支援、保育の領域では、資料を蓄積して考察し支援方法を検討していくべきであろう。

母親が、乳幼児の発信に対応するために試し行動をとる記録が3例あった(記録 No.5, 7, 18)。いずれも乳幼児が不機嫌で泣いたり、ぐずったりしているケースである。おむつ替えをする、授乳する、気に入りそうな玩具や場面をみせるなどしている。乳幼児の発信、特に泣くという行動については、その要因をつかむまでに時間がかかることもあるし、家庭とは異なる場に来ているため余計にわかりにくいこともあるだろう。母親は、乳幼児の様子を見ながら対応していくのである。

IV おわりに

自然観察場面における母子相互作用の分析を行ってきた。母親は、子育てだけを行っているのではなく、家事、仕事など日常生活の中で様々な役割を果たしている。フィールドになった子育て支援施設は、「肩の荷を半分おろしてください」

という理念の下、母子がともにゆったりと過ごす場になっている。一方で母親が我が子にも意識を向けていてもらうことも伝えている。「半分」の意味がここにある。記録を解析すると、来所者はこの点を理解しており、乳幼児を見守りつつ応答的にかかわっているといえる。

母親が乳幼児の発達を促すためのかかわりとして「足場づくり」と意図的行動がみられた。母親自身がどのように乳幼児の発達や状況の理解をしているかによってこれらの行動に違いが出てくるのではないだろうか。乳幼児の健全な発達を促すうえで重要なかかわりであるだけに、今後は母親の特性などを理解したうえで相互作用を分析する必要があると考える。その点からいうと、応答性の質や頻度などについて個人差があるのかについて、今回はランダムに採取した記録であったため明らかにできなかった。今後の課題としたい。ある特定の母子を継続観察することも考えていく必要がある。子育て支援の在り方を考察する上でも有用な資料となるだろう。継続して取り組んでいきたいと考える。

引用文献

内閣府 (2014). 平成 25 年度家族と地域における子育て意識調査報告書, 内閣府.

参考文献

- L.E. パーグ, A. ウインスラー (2001). ヴィゴツキーの新・幼児教育法 幼児の足場づくり, 北大路書房.
- T.G.R. バウアー (1980). 乳児期—可能性を生きる, ミネルヴァ書房.
- 海保博之・原田悦子 (1993). プロトコル分析入門, 新曜社.
- 柏木恵子 (2008). 子どもが育つ条件—家族心理から考える, 岩波書店.
- 柏女霊峰, 山本真実 (2000). 新時代の保育サービス, フレーベル館.
- 岡本夏木編著 (1988). 認識とことばの発達心理学, ネルヴァ書房.
- V. プライア・D. グレイサー, 加藤和生監訳 (2008). 愛着と愛着障害, 北大路書房.

- 佐伯 胖 (2007). 共感 育ち合う保育のなかで,
ミネルヴァ書房.
- 桜井茂男 (2006). はじめて学ぶ乳幼児の心理—こ
ころの育ちと発達の支援, 有斐閣ブックス.
- ヴィゴツキー (2001). 思考と言語 新訳版, 新読
書社.

(2016.9.28 受稿, 2016.11.7 受理)